あの日、未来は明るかった―。
慌ただしくもほっこりと、
現代人の郷愁を誘う
“昭和30年代のマスカルチャー”

カラーテレビ狂想曲

Color TV rhapsody

2010年末、昭和の大女優、高峰秀子が86歳で亡くなった。3歳から活躍した子役出身だけに、サイレントからトーキー、モノクロからカラー、映画からテレビへと映像の発展と共に歩み、初の国産カラーによる映画『カルメン故郷に帰る』（1951）にも主演した。戦前からカラー映画のあった欧米よりもかなり遅れたうえ、まだ色調が不安定だったため、失敗に備えてモノクロフィルムで同時撮影する有様だったが、以後徐々にカラー化が進んでいった。

一方、昭和28年（1953）に放送の始まったテレビでカラー放送が開始されたのは昭和36年（1961）の秋だった。こちらは、アメリカ、キューバ（！）に次いで世界で3番目。当時の番組表を見ると、思ったよりカラーの番組が散見されるも、トップのアメリカとの差はまだ著しく、カラー放送受像機が高過ぎたため普及の歩みはのろかった。40～50万円という価格は国産の中級車にも匹敵し、アメリカのGE社製なら、これをさらに上回った。おまけに『スーパーマン』、『ララミー牧場』など、本国では途中からカラーになった番組も日本ではモノクロで放送され、カラーの番組自体が少ないとあっては購買意欲すらわかない。一般家庭では別世界の話だと諦観し、実際の色を想像するよりなかった。まっ、これはこれで結構楽しく、想像力の訓練にはなったが……。

我が家はもちろん、周囲でもカラーテレビ（当時は映画に準じて「総天然色テレビ」とも呼ばれていた）のある家庭はなく、電気店でも展示だけで通電しているところはまれだったので、まだ見ぬ幻の機器だった。完成したばかりの一応は駅ビルの地下で、カラーテレビの街頭放送をやっていると聞いて行ってみれば、何のことはない。3色ぐらいだったか、色の付いた下敷き状のプラスチック板をモノクロテレビの画面にくっ付けただけ。この板は「お宅のテレビがカラーになります」というような触れ込みで市販もされていた。こんな調子だから、東宝の怪獣映画を観に行って、テレビと同じチョコレートのCMが上映された時は、「わあ、きれい！」とどよめきが起こった。我が家では唯一、カラー放送に熱心だったNHKの現場で働いていた母親だけが見たことがあった。当時、出演者はカラー放送の仕様に合わせて口紅の色を制限され、髪まで染めさせられて、涙が枯れるほど強烈なライトを浴びせられた。そうした難行苦行には「カラー手当」が加算されたそうだ。それでも色はにじみ、ゆがんでも映るらしく、母親はカラーテレビに否定的なイメージを持っていた。

＊

初めて一部にカラー中継が導入された昭和39年（1964）の東京オリンピックで、カラーテレビが一気に普及したと言われる。しかし、それ以降も僕の周辺の事情は変わらず、初めてカラーテレビを目にしたのは、確か東京オリンピック直後に課外授業で訪れた、家電工場だったと思う。映画館の時と同じように一斉に歓声が上がった。だが、色はにじんで画面も幾分ゆがんで見え、原理などを説明してくれたお姉さんが「黒色がまだ出せない」と言う通り、濃紺に映る髪の毛には幻滅を禁じ得なかった。母親の言葉は、どうやら僕をたしなめるための方便ではなかったようだ。

それから間もなく、親友のHらと一緒に下校していたKの家に、カラーテレビが入ったらしい。僕の周辺では第1号だ。しかしKは、「見せろ」と言うといつもはぐらかし、なかなか〝らしい〟の域を出なかった。Kは好奇心が強く物知りな反面、肝心なところで必ず尻切れトンボになり、強く促すとベソをかく。子どものうちに一生分の涙を使い切ってしまうのではないかと思うほど、何かにつけて毎日のようにベソをかき、これが面白くて出張してくる上級生までいたほどだ。カラーテレビの件も、チクチク自慢するのが僕やHの癇かんに障り、「本当はカラーテレビなんか無いんだろう？」「『空テレビ』じゃないのか？」とからかうと、Kは例によって半ベソ顔になり「だったら来てみろよ！」と居直った。思い通りの展開に、僕とHは顔を見合わせてにんまりした。

カラーテレビ1号機　写真：東芝科学館提供

約束の土曜日、雨上がりの午後にKの家を訪ねた。案内された居間には、確かに大きなカラーテレビが鎮座し、負けないくらい体格の良いおっとりしたお母さんが、折を見てスイッチを入れてくれた。真空管のテレビは画面が出るまで時間がかかる。1秒が1分にも感じられ、ようやく画像が現れた。ところが、お母さんがチャンネルを何度回しても、カラーの画面が出てこない。「あら、この時間はどこもカラー放送をやっていないわ」。新聞を手にしたお母さんは、申し訳なさそうに言った。僕はかすかに赤味がかった単色コピーのような画面を、虚しく見つめるだけだった。

うちにカラーテレビが来たのは、この少し後ぐらいだったと思う。ある日、学校から帰ったら、今朝まであったテレビがふた回りくらい大きくなっていた。それまでもテレビを入れ替える際は、電気屋さんが庭の高いアンテナと何度も往復して調整に四苦八苦していたが、今回は特に大変だったようだ。初期のカラーテレビは鉄の皿を持って前を横切っただけで調整が狂うと聞いたことがあったが、このころでもさらに本体のいくつものツマミを回しながら調整しなければならなかった。帰宅した叔父は

電気屋さんの調整が気に入らなかったらしく、しばらくいじり回し「ここは絶対いじるな！」と僕に厳命した。

カラーテレビは髪の毛も黒く見え、色のにじみもゆがみも感じられなかった。突然のことでにわかには実感がわかなかったが、次第にやはりカラーはいい、きれいだ！と感動が込み上げてきた。この感動に比べたら、ハイビジョンだのデジタルだのは目じゃない。とりわけ、今までモノクロで観ていた番組をカラーで見た時は、喜びもひとしおだった。

いまだに、モノクロの旧作映画のカラースナップなどを見ると興奮を抑えきれない。10年ほど前に、故郷の蔵から出てきたという野口英世のカラー写真を見た折もそうだった。想像していた色が合っていればしてやったりの気分で、違っていても新たな発見をしたようで、またうれしかった。

発見といえば、鳴り物入りで始まった『FBIアメリカ連邦警察』の主役エフレム・ジンバリスト・ジュニアの色が黒いのには驚いた（彼は純粋な白人だ）。日本では同じ日にリピート放送していた、モノクロの『サンセット77』の時はまったく気付かなかった。カラー調整が狂ったのかと思ったら、他の出演者は普通の顔色をしていたので彼が地黒なのだと納得した。雑誌にも同様な感想が載っていた記憶がある。

カラー化の余波は各方面に及び、よほどうれしかったらしく、場違いに派手な服を着ている出演者が目立った。カラー調整はどうしても各自の主観に左右される。微妙にずれていると感じたら、僕は電話ボックスなどが出てきた時に電話の色に合わせたりして調整していた。もちろん、調整をいじったことは叔父には内緒だ。

三洋電機が「カラー劇場」と銘打った、初の国産カラーアニメといわれる『ジャングル大帝』が始まり、エノケン（54ページ「粉末ジュース」の項参照）の「うちのテレビにゃ色が無い、隣のテレビにゃ色がある……」のCMや、直後の『ウルトラマン』がカラーテレビの普及にさらに拍車を掛けた。カラーテレビを買うと中華料理店にご招待という電気店もあったそうだ。

しかし、新たな火種も生んだ。「画面の片隅に出る〝カラー〟のテロップが嫌味たらしい」とか、海外旅行が自由化される以前から世界中の文化や風俗を紹介していた『兼高かおる世界の旅』で「きれいだきれいだと連発するのはやめてほしい、うちは白黒テレビなんだから……」という投書が新聞に載ったりもした。

他方、カラーテレビは目に悪い、有害な電磁波が出るなどの俗説も信じられ、時期尚早と買い控える家庭も少なくなかった。うちより裕福なはずのHの家もそうだったようで、NHKの『タイムトンネル』というアメリカのドラマをうちに観に来ていた。自ら実験台となったタイムマシンの研究者が、さまざまな時代をさまよって歴史的事件に遭遇する話で、タイムワープする際の万華鏡のような映像は確かにカラーで見る価値はあった。

ある時、Hが珍しく遅れてやってきた（待ち合わせにはよく遅れてきたが、放送にはまず遅れなかった）。無灯火で自転車に乗って警官に職務質問され、「タイムトンネルを観に行く」と言ったら「ん？　丹那トンネル？」とかえって怪しまれたそうで、2人で腹を抱えて笑った。

やがてHを始めカラーテレビを入れる家庭が相次ぎ、中には電話でわざわざ報告してくる奴もいた。昭和45年（1970）の万博のころまでは、それくらいインパクトのある家庭の一大事だったのだ。番組の方もカラー化率100%の目標をほぼ達し終え、新聞の番組表の表示も、逆転してモノクロのみに付くようになった。にもかかわらず、昭和50年代の中ごろまでは、モノクロの旧作映画を放送すると「急に色が出なくなった」「テレビが壊れた」といった電話がテレビ局に必ずかかってきたという。車、カラーテレビ、クーラーのいわゆる「3C」のうち、カラーテレビは最も高度成長期を牽引した原動力だったのではないだろうか。クーラーの入った日は覚えてなくとも、カラーテレビが来た時のことは鮮明に覚えている人が多い。

素朴とも言える目標に向けて懸命に働けば、それだけの対価を得られた。物のあふれ返った現在ではこうした対象を見つけることが難しいどころか、生活の基盤さえ危うくなってきた。些さ細さい（でもなかったが）なことに喜びを見出し、それを共有できた社会の方が健全だし、ずっと好ましいのは言うまでもない。

リモコンテレビが欲しい！
Remote-control TVVernal years of TV

僕にとっては、テレビに色が付くことにも増して手元で操作できること、すなわちリモコンテレビの方が喫緊かつ重要な命題だった。物心ついたころからひいきの番組で曜日を覚えていたぐらいで（女優の藤田弓子さんもトーク番組で同じようなことを言っていた）、観たい番組が増えて同時間帯に並ぶにしたがい、ハムレットの心境に立たされる場面が多くなってきた。おまけに、7時のニュースだけは絶対に譲らない祖父や他の家族とのせめぎあいも頭が痛かった。今より番組が（局も）少なく、編成もアバウトで、放送時間の変更や本放送と並行したリピート放送も多かったために、随分助けられた。当時の番組表を確認すると、本来観られるはずのない裏番組を観られたのはこうした放送局側の事情があったからだが、視聴者の僕がいわゆるザッピングを駆使して切り抜けていたことも間違いない。僕は、この裏技の名人であり先駆者だった。

ザッピングは正しいテレビの観方ではなく、作り手にも失礼ではある。だが、録画なんかできないのだから、そんなことは言っていられなかった。帯ドラマは設定さえ飲み込んでおけば筋は大方の予想が付き、1話完結の連続物でも最初と最後は大体決まっている。ここさえ押さえて想像を働かせれば何とかなった。後に再見できた番組のほとんどは当たっていたから、随分想像力の訓練にはなったようだ。

だが、その対価は小さくはなかった。テレビのチャンネル合わせはだいぶ後までダイヤル式で、普通に使っていても次第にケーブルが緩んで合いにくくなる。頻繁なザッ

ピングはその寿命を極端に縮め、ダイヤルごとすっぽ抜けたこともあった。「テレビが傷むだろ！　いい加減にしろ！」と父親が怒るのももっともだった。食事中に身を乗り出す行儀の悪さと落ち着きのなさも叱しっ責せきの対象になった。そんな時、アメリカのドラマなどに出てくるリモコンテレビがどれほど欲しいと思ったか知れない。

後に洋画劇場で観た大スター、ゲーリー・クーパーの遺作『六年目の疑惑』（1961）や『アパートの鍵貸します』（1960）にもリモコンテレビが登場した。『アパート～』の主役は一介のサラリーマンだから、もうかなり普及していたのだろう。日本でも有線の物があったらしいが、話題にすらならず、うちでも眼中に無かった。小学校の高学年になったころは、今は百円ショップでも売っているマジックハンドの先に羽根を付けたような器具を思い付き、特許を取ろうかと考えたことまであった。

＊

日本初の無線リモコンテレビ「三洋ズバコン」が発売されたのは、昭和46年（1971）。もう高校生になっていた。俳優の本郷功次郎のCMがよく流れ、リモコンが本体に収容できるようになっていたが、まだダイヤル式だった手元のチャンネルは一方向にしか回らなかったらしい。これでは回しているうちに場面が変わってしまう。おまけに誤作動が多く、音もうるさかったようで思ったよりは普及しなかった。スポーツ中継などが同時に観られる、画面の一部に他チャンネルがワイプする（音声は出なくて確かモノクロだった）マルチ型が発売されたのも同じころだったと思う。しかし、祖父母と叔父は映りがきれいだからとテレビはビクター党。メーカーにさほど頓着しない父親もスポーツ中継に興味は無く、ほぼ決まった番組しか観なかった。いずれにしても、これらのテレビは我が家には縁の無い物で、友人などの家庭でも買い求めたのはただ1軒だった。

僕自身も観たい番組が減り、どうしてもチャンネル権を確保せねばならないのは外画ドラマと洋画劇場ぐらいになっていた。全盛期を過ぎた外画ドラマは激減して、放送時間も遅くにずれ込んでいたが、映画の方はほぼ毎日どこかの局でゴールデンタイムに放送していた。ソフトが無い当時は、契約切れで名画座にも掛からなくなった作品は、大幅にカットしてあってもテレビで観るよりなかったのだ。少し前にテレビを買い替え、それまで観ていたソニーの14インチカラーテレビが僕に回ってきていたので、家族（主に父親だ）と揉めそうになった時は自室で観た。父親とはこの2年前の中3の夏休み中、名画『ピクニック』（1955）を観せてくれなかったのが原因で大ゲンカになっていた。腹いせに父のブランデーを水で薄めてアメリカンにした僕も悪いが（あっ、増えてる！と発覚した時には、またまた試合再開となった）、酔った勢いで半ば嫌がらせのように譲らなかった父親も大人気ない。テレビをくれたのも少しバツが悪かったのと、不毛の闘争に懲りたからだろう。しばらくは寝たふりをして自室で深夜劇場を観ていたが、大学受験を控えて多忙になったうえ、石油ショックで放送時間が短縮されて、14インチの出番は減っていった。

結局、リモコンと呼べるテレビがようやく入ったのは、大学を卒業する間際だった。やはりビクター製で、触れるだけでチャンネルの替わるタッチ式だった。呼べる、と言ったのは、リモコンが別売りの有線で、確かズバコンと同様に一方方向にしかチャンネルが換えられなかったからだ。これなら直接本体に触れた方が手っ取り早い。無線式の物はまだあまり一般的ではなかった。

思うに、カラーテレビに比べてリモコンがなかなか普及しなかったのは、その必要が無かったからではないだろうか？　日本製のテレビは税金が高くなることもあって、アメリカのより概して画面が小さく、茶の間に置いてコタツなんかに入りながらみんなで観る物だった。手を伸ばせばすぐに届く。だからこそ、子どもの僕にも簡単にザッピングができたのだ。それに引き換え、部屋も広く何でも自動にしたがるアメリカでは、リモコンはむしろカラーよりも優先すべき課題だったのだろう。

ズバコンが発売されたのは、そんな日本

の住宅事情や生活様式が大きく変わり始めていた時期と合致した。カラーテレビの普及に伴って画面も本体もだんだん大きくなり、マンションが急増して茶の間はリビングに取って代わられ、椅子とテーブルの洋風の生活が普通になっていった。いくらか広くなったとはいえ、狭い部屋がこぞって買い求めたソファやリビングボードなどに占領される珍妙な光景は外国人から揶揄ゆもされたが、昭和50年代の中ごろには、それなりの価格のテレビの多くに本格的（？）なリモコンが搭載されるようになった。お年寄りには特に重宝され、晩年の祖父母も大いに活用していた。一方、視聴率に支配される放送局にとって、リモコンテレビの普及は大変な脅威となった。何しろ、面白くなければすぐにチャンネルを替えられてしまう。2時間ドラマでは他局の別番組の始まる後半の前後に見せ場を持ってきたり、1分でも早く始めようと○時57分

石油ショック

「オイルショック」「石油危機」とも。戦争などにより中東からの原油の供給が逼迫したり、価格が高騰して経済に混乱が起こる状況を指す。1970年代に2度起こり、1回目は昭和48年（1973）、2回目は昭和54年（1979）。昭和48年11月ごろには、不安心理から「紙が無くなる」という噂が広まり、数か月にわたってトイレットペーパーの買い占め騒動が起こる。実際にはトイレットペーパーに原油価格の影響は無く、国内の紙の生産も安定していた。

からという番組が増え、CM を挟んでしつこく引っ張るのも当たり前になった。チャンネルを替えてもどこも一斉に CM タイムで、同じのが流れたりしてるから敵もさるものだ。こうしたイタチゴッコはセンセーショナルな方向にどんどんエスカレートし、場面転換も目まぐるしくなって、演出の領域にまで影響を及ぼしている。

リモコンの方も便利になり過ぎた。リモコンでも操作できるのではなく、リモコンでしか操作できない項目が増え、リモコンを失くしたり説明書がなければお手上げだ。まさに『鉄人 28 号』の主題歌のように「大事なリモコン」（訛なまっていてルモコンと聞こえた）だ。ずっとリモコンを切望してきた僕としては、こうした予想外の副産物は腹立たしくもあるが、その重要性は以前とは比べ物にならない。つまらない、あるいは不快な俗悪番組を観たくないがためで、ザッピングの手際にいっそう磨きがかかった。もっとも、最近はチャンネルを替えるよりテレビを消す選択の方が多くなっている。

クーラーをつけたまま寝ると死ぬ !?
Home air-conditioner

クーラーをつけたまま寝ると、死ぬ！

子どものころに刷り込まれた〝常識〟は、大人になってからも完全に拭い去れない。クーラーの常識の逆転こそ最も変わった物の一つであり、同時にさまざまな深刻な問題も含んでいる。先般の大震災の影響で節電が叫ばれる今、良い機会なので、我が国の冷房事情の変遷とその周辺を、超パノラマ的に振り返ってみたい。

＊

いわゆる「3C」のうち、モノクロに色が付いたカラーテレビは誰もが切望し、それがかなった日のことをよく覚えている。行動範囲が飛躍的に広がる車も然しかりだ。一方、クーラーについては、あるに越したことはない一種のぜいたく品といえた。

30 度前半で猛暑。夏の平均気温は今よりずっと低く、熱帯夜は数えるほどで、残暑も短かった。炎天下で起こる日射病はあっても、室内で発症する熱中症なんて聞いたこともなかった。それどころか、運動した直後は腹を壊すから水を飲むな！と体育教師まで言っていた時代だ。僕や周辺はそんな言いつけを守らなかった（だから、無事だった）が、中には倒れたり死んだ人もいただろうことは想像に難くない。

僕は 2 月の生まれで冬にも強いが暑さにも強く、短くもギラギラ輝くあの夏の開放感がたまらない。夏休みにスイカ、枝豆と、大好物も並ぶ。冷房漬けになって夏を楽しまないなんて愚の骨頂だ。だから、夏らしい風情を一変させたクーラーの登場には、ちょっと複雑な想いも抱く。

僕が物心ついたころ、デパートや劇場、ちょっとしたレストランにはもう冷房が入っていた。そうでない所は大きな氷柱が置かれ、大型の扇風機が回っていた。町中の飲食店にも「冷房入っています」の張り紙をしている所が増え始めていた。一歩入るとひんやりし、冷風の吹き出し口に一様に付けられた、薄いブルーのリボンが見た目にも涼しさを運ぶ。その前に立って開襟シャツを引っ張りながら、当時大人がよく持っていた扇子で内側に冷気を取り込んでいるおっさんも時々見掛けた。

＊

うちに初めてクーラーが入ったのは、確か東京オリンピック前年の昭和 38 年（1963）の初夏だった。電気屋さんと大工さんが 2、3 人やってきて、1 日がかりで台所の隣の茶の間に取り付けていった。クーラー機能オンリーの、一体型ウインド一式というやつである。これなら最近のように、室外機だけ盗られる心配はまったく無い。室外機が別のセパレートタイプや、暖房機も兼ねるデラックス型と呼ばれるエアコンも既にあったらしいが、値段がべらぼうに高かった。そのうえ、エアコンは内蔵された補助用ヒーターが電気を食うこともあって、ほとんど普及していなかった。冷房もしくは和製英語の「クーラー」と長く呼ばれていたのは、このためだろう。暖房といえばコタツや石油かガスのストーブが主流で、電気で暖をとる発想自体がそもそも乏

しかった。

ウインド一型クーラーは文字通り、基本的には窓にしか設置できず、窓のない部屋では壁面に穴を開ける必要があって、電気屋さんだけの手には余った。家が電気店だった友人の話では、ほとんどが大工さんや工務店と提携していたという。うちでも、大工さんが茶の間の窓ガラスを外して置台をつくり、木枠を取り付けているあいだに電気屋さんが配線工事をし、最後に 3 人がかりで抱えてはめ込んだ。ほぼ全部が金属でできていたから、さぞ重かっただろう。電気屋さんが試運転のスイッチを入れると〝ガンッ！〟とガラスが揺れ、〝ゴーッ！〟と大きな音がしばらくしてから、冷たい風が出てきた。

温度設定も大まかにしかできず、こまめな調節が欠かせない。風向も手動で、ただひたすら冷やすだけだった。一応はあったサーモスタッドは、余程でないと作動せず、再始動の度にガラスに衝撃が走った。構造も単純だったから今時のエアコンよりもよく冷えた気がした反面、冷やすのと引き換えに吐き出される熱量には驚かされた。

入電時のショックといい手打ちうどんのように太い配線といい、いかにも電気を食いそうだった。電気屋さんも、クーラーを使う時はなるべく他の電気を使わないようにと言って帰っていった。特にトースターのように電気を食う物は要注意、とも付け加えた。注意を守っていても、夕刻以降にクーラーをつければ一瞬電灯が暗くなり、うっかり余分な電気を使うとヒューズが飛んで停電した。大体は叔父の業務用ドライヤーが犯人だった。ヒューズは夏以外にもよく飛んで、それを率先して取り替えるのも叔父だった。懐中電灯を照らして瀬戸製の白いヒューズボックスを開け、溶けたヒューズをスパナのような形の新品と手早く換える。この手間を嫌って針金などで代

用して火事になる家が後を絶たず、電力会社がよく注意を呼び掛けていた。従来の日本の家屋では、多量の電力を消費することはそれこそ想定外だった。次々に出てくる家電がもたらす恩恵は、こうした危ういバランスの上に成り立っていた。そんなある日、僕は家人の留守を幸いにクーラーをつけっ放しにして怪奇本を読みふけっていた。あまりに熱中し過ぎて、家人が帰宅したのも、冷え過ぎていることにも気付かなかった。祖母は一歩入るなり、尋常でない冷え方に驚いて僕の手をつかんだ。「こんなに冷たくなっている！」と大目玉を食らい、クーラーをつけたまま寝て死んだ人もいる！と散々お説教された。実際、いつもは不快な台所の熱気もこの時ばかりはむしろ心地良く感じられ、かなり暑い日だったにもかかわらず、庭に出て走り回ってもまったく汗が出てこなかった。扇風機についても同じことをしつこく言われたし、他にも、テレビをつけたまま寝ると爆発する！ 変な目薬を点けると目が潰れる！といろいろあった。大げさだと話半分に聞いていたが、クーラーに関してはあり得ない話でもないと思った。翌月には跳ね上がった電気代の請求書が来て、またも怒られ、クーラーというのはいろいろな点で気をつけて付き合わねばならない存在だと痛感した。もともとうちでは、水道やガス以上に電気の無駄使いには厳しかった。特に石油ランプが珍しくなかった時代の人間である祖父母は、クーラーはぜいたく品という思いが強かったのだろう。

しかし、巷ではクーラーはどんどん増え、丸ビルのような古いビルの外観も一変させた。窓から落ちそうな物もあって、もしこのころに大地震が起きていたら、被害をさらに拡大させたに違いない。クーラーから放出される水滴や熱風を浴びたという怨（えん）嗟さの声もよく聞かれ、ピアノと並んで近隣トラブルの上位を占めるようにもなっていった。ある時母親が、朝から暑くなったのは車が増えたせいだと何気なく言ったが、それにクーラーの放出熱が加われば気温が上がるのは自明の理だ。どこまで気温が上がるのだろうか、と漠然とした不安にかられたのをよく覚えている。

＊

僕が小学生高学年の初夏のころ、家族で地元駅そばのＳマンション（という呼称はまだ一般的ではなく、アパートや高級アパートなどと呼ばれていた）に引っ越した。冷暖房は集中式になっていて、壁のボタンを押すと天井近くの吹き出し口から静かに冷風が流れてきた。こうした建物は窓を開けても風が抜けないうえ、ベランダも無かったのでエアコンは必需品に近い。南側に面した僕の部屋は日当たりが良過ぎて、新幹線を模ったナショナル（現パナソニック）の２代目電気鉛筆削り器を窓際に置いておいたら、カバーが溶けていた。

エアコンは弱中強のボタンで簡単に調節ができ、つけているのを忘れるくらい静かだった。冷え方も柔らかく、生家のクーラーのように鋭角的ではない。これならつけたまま寝ても大丈夫そうだったが、もちろんやらなかった。冷暖房代がどういう料金体系になっていたのかはわからないが、おそらく使用量にかかわらず毎月一定額を払わされていたと思う。黎（れい）明（めい）期きだった当時のマンションは法的にも未整備で、極言すれば購買意欲をそそることばかりに目がいって後のことをあまり考えておらず、電気代を各戸で均等割りという所さえあった。

翌年の夏前、僕たちはまた生家に戻って離れで暮らし始め、その時にセパレート型のクーラーを取り付けた。ただ、あまり使うことはなかった。時代遅れとなった主家の一体型ウインドー式クーラーは、やがて高校に入るころに取り外された。

＊

昭和50年代になると、電車はおろかバスにまで冷房が入るようになり、強過ぎる冷房やこれを原因とする冷房病が問題化した。夏に防寒対策とは、明らかに限度を超えている。会社や商業施設に入った当初は快適でも、少し経つと体が芯から冷えてくる。喫茶店などでは客の回転率を上げるために故意にやってるのではないかと勘ぐりたくなるほどで、夏でもスーツが手離せなくなった。「夏風邪はバカが引く」といわれてたのに、僕も含めて風を引く人が増えた。暑さで汗腺が開いているところへ冷気を長時間浴びれば、体に良いわけがない。

それでも、毎年エアコン商戦の好況が伝えられて、いろんな機能が付加されていった。個人病院に入院した親戚の老人を見舞った際、夜通しエアコンをつけているのを知って大丈夫かなと思ったが、エアコンは既にそうした使い方に対応できるまでに進化していた。

だが、僕はこの少し前、エアコンをつけたまま寝たのが原因で後遺症が残ったという人に会っており、祖母の「クーラーをつけたまま寝て死んだ人もいる！」という言葉と共に、警戒感が再び頭をもたげていた。

今や夏の気温は体温を超える37、38度にもなり、熱中症が多発している。熱中症で亡くなる人の多くが老人なのは、僕のように昔の“常識”にとらわれているのと、やはり電気代がもったいないという精神がエアコンの使用をためらわせるからではないか。今年も再三の呼び掛けにもかかわらず、何人かが亡くなった。こればかりは「昔はこうだった」や精神力では乗り切れない、喫緊の社会問題だ。

私たちの生活を快適にするだけでまったく攻撃性のないはずだった冷房装置も、人類が開けてしまったパンドラの箱の一つだったのだろうか。

ポラロイドカメラ
Polaroid camera

携帯やデジタルカメラはおろか、スピード現像もはるか先の話。撮ったその場で現像ができるインスタントカメラは、時代の先端を行く夢のような商品に思えた。

代表的なのはアメリカのポラロイド社が開発したポラロイドカメラだろう。本国では戦後間もなく発売され、既にポピュラーになっていた。うちではさっそく父親が買ってきて、例によって僕が実験台になった。今のようにコンパクトではない。普通のカメラよりも大きく、写真館のカメラを小さくしたような形をしていた。パチッとシャッターを押した直後、カメラから送り出されたハガキより小さめの版には何も写ってい

ない。「やっぱり、ウソじゃない」。僕はまだ半信半疑だった。

「まあ、待て」。父親はその版をかざしながら、上紙を剥はがした。「あっ、失敗した。もう 1 回だ」。今度は、僕も催促しなかった。父親はしばらく待ってから、さっきより慎重に上紙を剥がした。ぼんやりした輪郭が次第に形を成していく。確かに僕だ！　まるで手品だ！「ほら、ちゃんと写っているだろう」。父親は得意顔だった。そのころいた猫や犬と一緒に撮りたいといったら、「高いんだから、この次だ」。その約束は一応果たされたものの、父親の関心はすぐにこのカメラから離れていった。思ったより時間が掛かり、焼き回しもできないうえ、何より専用フィルムが高くて、まだカラーが無かったのもお気に召さなかったらしい。カメラに一家言ある父親にすれば、腕の見せ所のないポラロイドは、それこそインスタントラーメンと店のラーメンくらいの違いがあったのだろう。

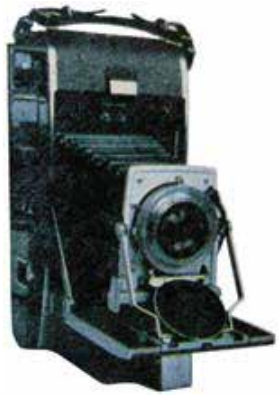
しかし、誰でも簡単に撮れてすぐに見られるため、国産品も開発されて普及していった。遠来の客に手渡したり、パーティなどでお遊び気分で撮るにはもってこいだ。僕も友人の誕生会などで、何回か撮ってもらったことがある。ただ、版のサイズが通常の写真と異なって厚みもあり、アルバムに保存するのには適さない。そんな難点も敬遠されてか、ある時期からあまり見なくなった。

専用フィルムが高価なのがやはりネックだったようだが、最近になって意外な理由を知った。映画化もされた谷崎潤一郎の『鍵』の中で、いかがわしい目的に使われる場面が有名になり、ポラロイドカメラを所持していることを他人に知られるのがはばかれるようになったらしいのだ。そうした用途も大いに販売を助けたとは聞いていたが、文豪も罪なことをしたものだ。ヒット商品の割に、滅多に見掛けなくなったのはこういう理由だったのかと納得がいった。

しかし、プロカメラマンの試し撮りを含む正当な（？）用途には長く活躍し、写真の改ざんができないことから、警察の鑑識や保険会社に提出する事故の証拠写真には重宝がられたようだ。

僕が車をぶつけられた際も、整備工場のおじさんが持ってきた。久々に見て懐かしく、「ポラロイドですね」といったら、「うちもこういうの入れないと、遅れてしまいますから」とまんざらでもなさそうだった。昭和 50 年代も終わりのころだ。老齢に近い兄弟が戦前からやっている工場だから、無理もない。おじさんは取り出した版に息を吹き掛けたり、つなぎの袖で何度もこすって「今日みたいに寒い日には、なかなか出てこなくてね」とぼやいた。カメラはぐっと小型になり、専用フィルムも上紙を剥がす方式から、自然に浮き出るようになっていた。

それから数年して、父親から新品のポラロイドカメラが送られてきた。何かのプレゼントではなく、時々気まぐれにこういうことをする。愛猫を撮ったりしていたが、相変わらずフィルムが高い。『写ルンです』



なども既に出ていたから死蔵しているうちに、カメラもフィルも生産が打ち切られてしまった。過去の遺物には違いないが、絵が出てくるまでのつかの間の期待感は、今でも妙に懐かしい。

著者：千蒙豹一郎
作家・評論家。日本刑法学会、ベット法学会会員。
著書に『法律社会の歩き方』（丸善）『スクリーンを横切った猫たち』（ワイズ出版）の他、『東京新聞』、『猫生活』（緑書房）『ミステリマガジン』（早川書房）をはじめ連載多数。
独特な題材と切り口で、草創期からの海外ドラマの研究にも力を入れている。

＊当書 DVD 版は、月刊 FDI 編集部にて＊
本文：108 ページ / 映像：2 分 23 秒　2012 年 9 月 ミリアムワード㈱ 発行
価格：1,980 円 (税込)
株式会社ユニワールド　東京都世田谷区上北沢 3-17-5
TEL.03-6379-8890　FAX.03-6379-6190　info@uni-w.com